神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Undercurrent of the Korean boom

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 敏彦, Tanaka, Toshihiko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1493

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

韓流ブームの底流――「脱亜入欧」からの脱却

田中　敏彦

一、はじめに　林権澤の映画との出会い／脱亜入欧」的姿勢／アジア的転回
二、韓流ブーム　「冬ソナ」前／二〇〇四年「冬ソナ」／「冬ソナ」後
三、韓流ブームの裏面　竹島（独島）／嫌韓流／北朝鮮
四、韓流の底流　脱亜入欧からの脱却／東アジア共同体へ／方法としてのアジア
五、おわりに　恨みの晴らし方／恨（ハン）の解き方

＊本稿は二〇〇八年七月二六日にユニティで市民大学講座の一環として行われた同名の講演内容を基に書き直したもので、できるだけ元のかたちを残し、現時点（二〇一二年九月）で修正したり補足したりすべきところは註として文末に付け加えてあります。

一、はじめに―アジア的転回

一・一　林権澤の映画との出会い

日本で韓流（ハンリュウ）がブームになった二〇〇四年に私は韓国に一年間滞在していました。二〇〇四年四月三日に「ヨンさま」こと**ペ・ヨンジュン**が羽田で五千人とも言われる中高年女性に熱狂的に歓迎されている頃、私は飛行機で釜山に行き、釜山から開通したばかりの韓国の新幹線**KTX**に乗ってはじめて在外研究のため一年の滞在予定で韓国第三の都市大邱に到着したのです。

私はもともと仏文科の出身でフランス語とフランス哲学の教師ですから、普通ならフランスに行くのが当然のはずです。しかし私はフランスには長期間生活したことがあって、思い切って新しい国に行ってみたい、そして行くなら是非

韓国に行きたい、と思ったのです。時期的に韓流ブームにぶつかったので、韓流ブームに乗って韓国に行った、と思われるかもしれませんが、私が韓国に興味を持ったのはブームが起きる以前の一九九九年の秋頃に遡ります。その頃私はテレビで放映された林権澤（イム・グォンテク）という韓国の映画監督の三つの作品を三本続けて見る機会があったのです。それは『西便制（邦題・風の丘を越えて）』（一九九三）、『太白山脈』（一九九四）、そして『祝祭』（一九九六）であり、いずれも私がそれまで見たどんな欧米や日本の名作にも劣らない傑作でした。これほどすぐれた作品が日本に最も近い隣国で作られているということに驚くとともに、その隣国である韓国・朝鮮についてほとんど何も知らないということに気がついたのです。

『太白山脈』は、韓国の大学生の必読書といわれた趙廷來（チョ・ジョンネ）の大河小説を原作にしています。ちょうどその頃日本語に翻訳されたのは幸運でした（筒井真樹子他訳・全十巻・集英社・一九九九―二〇〇〇）。小説と、それを見事に凝縮した映画は、日本の敗戦によって植民地支配から解放された朝鮮が韓国と北朝鮮に分裂し、同じ民族が殺し合う朝鮮戦争にいたる悲劇を私に深く理解させてくれるものでした。

『祝祭』は、すっかり形骸化した日本の葬式とは異なった、いまなお実質を失っていない韓国の伝統的葬祭儀礼を克明に描いていてまことに興味深い作品です（伊丹十三の「お葬式」と比べて見ると日本と韓国の相違が浮き彫りになって面白い）。

そしてとりわけ『風の丘を越えて』に私は深い感動を覚えました。これはパンソリ芸人の親子の物語です。パンソリというのは日本でいうと浪曲のようなもので、独特の節回しで物語を歌う伝統芸能です。ユボンというパンソリ芸人は養女ソンファと義理の息子トンホにそれぞれパンソリと太鼓を教えながら旅芸人として放浪しています。三人が山野を歩いて旅をするシーンが繰り返し描かれるのですが、これらのシーンは日本の植民地支配や朝鮮戦争によって離散した朝鮮民族の運命を象徴していると同時に、さらに深く芸術家の運命を暗示していて、実にすばらしい。とりわけ、三人がチンド・アリランを歌い踊りながら丘を越えてくる五分四十秒も続く長回し撮影のシーンは、奇跡的とも言いたい感動的な場面です（「風の丘を越えて」という日本の題名はこのシーンから名付けられたものでしょう）。義理の息子トンホは社会的にも差別される貧しい旅芸人の暮らしに嫌気をさして父と姉（血はつながっていないのですが）から逃げ出して、漢方薬を扱う商人になり、結婚して子供も出来て普通の定住民の生活をするようになります。しかし彼はどうし

ても捨ててきた父と姉のことが気になって別れてたぶん十年以上たってから休暇を取って父と姉の行方を捜す旅に出るのです。そしてあちこち尋ね回ってトンホはしだいに、父ユボンは素直すぎて恨（ハン）のこもらない姉ソンファの声に恨（ハン）がこもるように、毒薬を飲ませて失明させてしまったこと、そしてユボンはついに恨（ハン）を表現しうるようになったソンファに「恨（ハン）に埋もれず恨（ハン）を越えよ」と言い残して世を去ったことなどを知ることになります。そして、ついに、ある旅館に滞在している姉ソンファを見つけ出し、昔のように姉がパンソリを歌い、弟が太鼓をたたいて一晩を過ごすのです。そして翌朝トンホは何も言わずに去って行きます。ソンファが滞在していた旅館の主人は、「あれはあなたがあれほど待っていた弟ではないのか、なぜお互いに名のらなかったのか」とソンファに尋ねます。「太鼓を聞いただけで弟だとわかりました。私たちは昨日の夜恨（ハン）を越えたのです。」とソンファは答えます。「恨（ハン）」とは何か、「恨（ハン）を越える」とはどういう事か。この問題はこの講演の最後で考えてみたいと思います。

ともかく、林権澤（イム・グォンテク）の映画をきっかけに、これほど深い芸術性をもった作品を生み出す隣国の歴史と言語を学びたいと思うようになったのです。それ以来、フランスを中心とする欧米の研究と並んで、韓国を中心とする東アジアの研究が、私の研究のもう一つの焦点になりました。韓国の歴史と文化を学べば学ぶほど、日本と韓国のつながりの深さが明らかになり、欧米の文化を研究するときにも、日本と欧米という軸だけではなく、日本と東アジアというもう一つの軸が必要であることを痛感するようになりました。このような経緯で、奇しくも日本で「冬ソナ」をきっかけにして韓流という大きな潮流が押し寄せた二〇〇四年に在外研究で韓国に滞在することになったのでした。

二・二　脱亜入欧的姿勢

しかし韓国の歴史と文化を学べば学ぶほど、私がそれまで無意識に維持してきた精神的姿勢を自覚せざるを得ませんでした。その姿勢とは、日本が明治以来とり続けてきた姿勢であり、欧米崇拝とアジア蔑視が表裏一体になった「脱亜入欧」的姿勢です。私は林権澤の映画を見る以前に、韓国の歴史や文化についてほとんど何も知らなかったのですが、それは私の個人的問題ではなく、日本が近代国民国家を形成した明治以来の国是とも言うべき姿勢であり、私も当然ながらそのような姿勢を共有していたことに気がついたのです。

この姿勢を明快に表現したのは福澤諭吉です。

≪されば今日の謀（はかりごと）をなすに、わが国は隣国の開明を待って共にアジアを興すの猶予あるべからず、むしろその伍を脱して西洋の文明国と進退を共にし、その支那朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず、まさに西洋人がこれに接するの風に従って処分すべきのみ。悪友を親しむ者は共に悪名を免かるべからず。われは心においてアジア東方の悪友を謝絶するものなり。≫（福澤諭吉「脱亜論」・明治一八年・一八八五・「時事新報」三月一六日）

福澤は「脱亜」と言っているだけで、「入欧」とは言っていないけれど、「西洋の文明国と進退を共にし、その支那朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず、まさに西洋人がこれに接するの風に従って処分すべきのみ」、と述べているように、内容的には「脱亜入欧」と表現することが出来ます。福澤は日本が進むべき道を「脱亜入欧」と思想的に整理しただけで、日本を支配していた薩長の藩閥政府がその道へ実際に日本を導いていったわけです。とりわけ「欧米によって失った所は朝鮮や満州で取り返す」（松陰の兄への手紙の一節）と主張した吉田松陰の弟子たち（木戸孝允・伊藤博文・山縣有朋ら）が果たした役割は重大です。

「脱亜入欧」的、富国強兵的な方針を私は「大国主義」と呼んでいます。大国主義とは、弱肉強食的な帝国主義であり、福澤の生彩ある表現によれば、こうなります。≪百巻の万国公法は数門の大砲に若かず、幾冊の和親条約は一筐の弾薬に若かず。大砲弾薬は以てある道理を主張するの備に非ずして無き道理を作るの器械なり。…各国交際の道二つ、滅ぼすと滅ぼさるるのみと云うて可なり。…我日本の外国交際法は、最後に訴る所を戦場と定め、…。≫福澤諭吉『通俗国権論』明治十一年・一八七八年・全集第四巻）

日本の近代には「大国主義」を批判し、アジアとの連帯を重視して欧米に対抗する「小国主義」というべき思想が存在していました。福澤に対立する小国主義の思想家としては中江兆民を、そして文字通り「小国主義」を唱えた石橋湛山を挙げることができます。小国主義という別の可能性があったことを掘り起こしていくのは、日本の近代は不可避的な道筋でありやむをえない運命であったという宿命論を批判することになり、日本の近代の問い直しにとってとても重要なことだと思いますが、ここでは指摘するだけにとどめておきます。

一・三　アジア的転回

植民地支配と侵略戦争を推し進めた大国主義の結果、日本は悲惨きわまりない敗戦（オキナワ・ヒロシマ・ナガサキ）を迎えたわけですが、敗戦は、それまでの日本の近代、植民地支配と侵略戦争の近代を根本的に検討して、反省すべき所は反省し、被害者には謝罪と賠償をして再出発すべきでした。戦後の西ドイツはそういう再出発をしたと言えます。ところが日本はそうはならなかった。なぜでしょうか？いまだに歴史認識の問題、具体的には教科書の記述をめぐって（従軍慰安婦の問題とか南京大虐殺の問題とか竹島や尖閣諸島の問題とか）、日本国内においても、韓国・北朝鮮そして中国からも、批判や抗議の声が挙げられ続けている。そういう意味で、まだ戦後は終わっていないのです。

その理由は、今結論だけ述べれば、アメリカの占領は、植民地支配や侵略戦争の責任を極東軍事裁判によって一部の政治家・軍人に押しつけて、植民地支配や侵略戦争を担った多くの支配者たちを免罪してアメリカの協力者に仕立てあげ、日本の属国化（植民地化）を成し遂げたからです。[註1] 日本の支配者たちは戦前の植民地支配も侵略戦争も根本的に反省していないし、また日本国民は自主的に侵略戦争や植民地支配を批判克服する努力を怠ってきたと言わざるをえないと思います。「脱亜入欧」は「脱亜入米」として現在まで連続しているのです。

それは欧米崇拝とアジア蔑視と大国主義から構成される日本人に根強い姿勢です。[註2] 私は自分のなかにこういう姿勢があることを、韓国の歴史と文化を学ぶ過程で自覚せざるを得ませんでした。近代において、朝鮮半島（韓国・北朝鮮）は日本と「表裏一体」であり、日本の近代は朝鮮半島を鏡にして見なければ本当の姿を捉えることができないと思います。私は韓国映画をきっかけにして起こった自分自身の変化を「アジア的転回」と呼んでいます。「脱亜入欧」的姿勢を脱却した「脱・脱亜入欧」的姿勢とはどのようなものか、私はいまのところ竹内好の「方法としてアジア」という考えに大きなヒントを見出しています。この点も最後にお話したいと思います。

二、韓流ブーム

二・一『冬ソナ』以前

二〇〇四年『冬ソナ』をきっかけにして起こった韓流ブームはテレビドラマや映画を中心とする文化的レベルでの交流です。

文化レベルでの交流が始まる前に、経済的レベルで大きな変化がすでに起きていました。二〇〇四年において日本の貿易総額に占めるアメリカの割合は一八、六％に過ぎず、中国や韓国や東南アジアやインドを含むアジアは四七％にものぼっています。すでに経済においては「脱米入亜」が現実のものになっているのです。二〇〇四年のコンテナの取扱量で神戸は世界ランキングの二九位、横浜は二八位、東京が一七位です。しかし世界ランキングの一位から六位までは、すべて東アジアが独占しているのです。つまり、一位・香港、二位・シンガポール、三位・上海、四位・深圳、五位・釜山、六位・高雄です。[註3] 神戸や横浜が後退している理由は、釜山がかわって東北アジアの物流の中心になっているからです。さらに釜山の発展にともなって、太平洋側の港湾よりも日本海側の港湾（秋田・新潟・山形・酒田・富山・金沢・敦賀・舞鶴・境港など）の物流がどんどん伸びていると寺島実郎は述べています。つまり物流の日本海シフトが起きているのです。（寺島実郎「真の東アジア連携を求めて」『「韓流」のうち外』徐勝他編・御茶ノ水書房・二〇〇七年・二六頁）

寺島実郎はまた、太平洋側を表日本、日本海側を裏日本と呼ぶのは、敗戦後に始まった習慣であることを指摘しています。敗戦後は「脱亜入欧」が「脱亜入米」に変わっただけで日本人の根本的姿勢は変化しなかった。最近までは日本にとって貿易とはまずアメリカとの貿易であり、政治的にも文化的にも太平洋の彼方のみを注視して生きてきた戦後の日本にとって太平洋側が表であるのは当然であったのです。

今でも政治的には日本政府はアメリカ一辺倒の政治を行っていますが、二十一世紀に入って日本は経済的にはすでにアジアとの関係のなかで生きざるを得なくなっている。アジアとの関係では日本海側を裏とする感覚はすでに揺らぎはじめているのではないか。

経済的に日本はアジアの物流の中で生きているだけでなく、文化的にも二〇〇〇年頃から韓国映画が日本で封切られて興行的に成功するようになります。たとえば、ホ・ジノ監督の『八月のクリスマス』（一九九九年）と『春の日は過ぎゆく』（二〇〇二年）は、繊細な日常生活の描写や微妙な心理表現で繰り返し見ても飽きないだけの高い芸術性があり、多くの日本人のファンを獲得しました。

カン・ジェギュ監督の『シュリ』（二〇〇〇年）は韓国の女性に変身して韓国の諜報部員の恋人になった北のスパイの悲劇を描いたアクション映画であり、娯楽映画でありながら背景となっている南北分断の現実が画面に緊張感を与えて

いて大ヒットしました。

また南北分断を背景にした悲劇であるパク・チャヌク監督の『ＪＳＡ』（二〇〇一年）も多くの観客を集めました。私は当時これらの映画を見ながら、韓国映画の黄金時代が始まっていると思いました。

二〇〇〇年に公開されたイム・グォンテク監督の『春香伝』は、興行的にはそれほど成功しなかったと思いますが、朝鮮民族が最も愛好する物語を、人間国宝のパンソリ芸人が舞台で「春香伝」を歌う映像と、物語の映像を交錯させるという手法で、映画化した作品です。

このように、経済的領域だけでなく、文化的領域では韓国映画が世界中で注目されはじめていました。韓流ブームが起こる下地は十分に準備されていたと言えるのではないかと思われます。それに二〇〇二年のワールド・カップ日韓共同開催も韓流ブームを準備した出来事であると言えるでしょう。

そして何よりも忘れてはいけないと思われるのは、韓国の映画やテレビドラマの爆発的な生産力を可能にしたのは、民主化の実現であったということです。イム・グォンテク監督やホ・ジノ監督の映画を見たり、金光石（キム・グァンソク）の歌を聞くと韓国の文化の深さを痛感します。これほど苦難の近代史を歩んできた民族は稀であり、また民主化をこれほど多くの犠牲を払って勝ち取った民族も稀であろうと思います。

一九九三年キム・ヨンサム大統領が初めての文民大統領に選ばれ、民主化が後戻り出来ない段階に到達したことを示したこの年、林権澤監督の『風の丘を越えて』が発表されています。この映画は観客動員数百万人を越える大ヒットになった初めての映画です（現在では大ヒットというと一千万人以上です）。この映画が社会現象になるほどの衝撃を韓国社会に与えたのは、「恨（ハン）を越える・恨（ハン）を解く」ことがあるリアリティに対応していた、すなわち民主化の実現に対応していたためではないかと思います。

一九九八年には民主化の象徴であったキム・デジュン大統領が金融危機の最中に誕生しました。「数発のミサイルは一本の映画に若かず。」この金大中の言葉は、福澤諭吉の「百巻の万国公法は数門の大砲に若かず、幾冊の和親条約は一筐の弾薬に若かず。」を踏まえた言葉であるかもしれません。金大中の言葉は文化立国の小国主義、福澤諭吉の言葉は軍事力優先の大国主義を要約する言葉です。韓国映画の興隆はとりわけ金大中の文化優先政策を背景にしていたと考えられます。

二・二　二〇〇四年「冬ソナ」

二〇〇三年に「冬ソナ」が衛星放送で放映され、さらに二〇〇四年に総合テレビでも放送され、韓流ブームが社会現象として注目されました。「冬ソナ」は初回からかなり反応があり、「冬ソナ」を選んだＮＨＫの小川純子ディレクターは次のように書いています。《一ヶ月を過ぎたあたりから、再放送を要望する電話やメールが殺到するようになった、さらに感想をびっしりと書き込んだ葉書や分厚い封書が届くようになった。感想だけでなく、視聴者自身の人生を振り返ったもの、家族についての思い出、今の日本社会についての批判など、実に中身の濃い手紙が届いた。多くが女性四十代以上、なかには九十才を越える方からのもの、巻紙に筆で書いた立派なお便りも少なくない。（…）ＮＨＫでは、衛星放送で三回、総合テレビで一回の合計四回放送したが、これまでＮＨＫに寄せられたメールと手紙は二万通を越えており、これほど反響の多い海外ドラマは他にはない。》（『韓流のうち外』新書館・p.80）

二〇〇四年は「冬ソナブーム」で日韓ともに沸いた一年であったと言えます。「冬ソナブーム」は韓国でもさかんに好意的に話題にされていました。なぜこれだけ爆発的なブームになったのか、その理由については良くわからないものの（韓国の映画は世界を席巻しましたし、テレビドラマも極めて高水準であることは確かですが）、USAtodayというアメリカの大衆新聞が、日本の「冬ソナブーム」は韓国文化一般への日本人の態度の変化を示すもので、それはアメリカの大衆文化離れを意味する兆候である、と分析しているのが、一番正鵠を得ているように感じました。さらにその新聞記事は、「ＮＨＫの小川純子プロデューサーは、日本が米国の大衆文化に飽きたと述べている」と伝えています。明治以後日本の欧米一辺倒（戦後はアメリカ一辺倒）はアジア蔑視を表裏一体としていたのですから、韓流（ハンリュウ）と呼ばれるこの現象がアメリカ一辺倒を突き崩す面をもっていることは確かだと思われます。それに最初に気がついて危機感を表明したのがアメリカだというのも当然かもしれません。

《ヨン様は韓日関係変化の信号弾

米大手新聞ＵＳＡトゥデイが十日、日本の「ヨン様ブーム」を大きく取り上げ、この韓流ブームは、不幸な過去の記憶が良好な韓日関係に急反転する信号だと分析した。

同誌はヨン様ブームに、アジア地域から長年の敵対感情が緩和、米国大衆文化に対する代案の模索、10年前の映画『マディソン郡の橋』を実際に訪問するような、日本人特有の凝り性の再来、などと意味付けた。また、日本による朝

鮮半島強制占領、百万人の在日韓国人が発生した経緯や彼らへの差別の歴史を説明し「だが韓国と日本がサッカーW杯を共同開催する2年前から変化が生まれ始めた」と分析した。

同誌は「日本の中年女性が、韓国のものなら何でも欲しがっている」とし「ペ・ヨンジュンだけでなく、キムチなど韓国自体がスターになった」と述べ、キムチについて「野菜、主に白菜の発酵食品」と読者に説明した。

さらに「（日本での）韓国人気は、米国の衰退と一部で合致する」とし「NHKの小川純子プロデューサーは、日本が米国の大衆文化に飽きたと述べている」と伝えた。≫（2004.12.12付の中央日報のインターネット版の記事）

二・三　「冬ソナ」後

韓国ドラマが日本の文化のなかに安定した位置を占めるようになったことは皆さんもよくご存じだろうと思います。その数の多さは、毎日いつでもどこかのチャンネルで韓国ドラマが放送されているのではないかと思えるほどです。当然ピンからキリまでありますけれど、全般的に韓国ドラマが、俳優のうまさ、ストーリー展開の奇抜さ、人間関係の濃密さなどで、日本や中国をはるかに引き離し、アメリカのドラマと互角以上に戦っていると言えそうです。最近では高句麗を建国した英雄を描いた『朱蒙』（二〇〇六）や高句麗の版図を最大限拡張した広開土王をペ・ヨンジュンが演じた『太王四神記』（二〇〇七）など歴史ものが面白いですね。

それから朝鮮王朝時代の誇り高きキーセンを描いた『黄真伊（ファン・ジニ）』（二〇〇六）も映像の美しさと台詞の面白さには感心しました。それから歴史物以外では、『バラ色の人生』（二〇〇五）という作品が面白かった。子供が二人いる中年女性が、浮気をした夫から離婚を迫られるわ、胃癌になるわで、バラ色の人生どころではない、悲惨な状況に追い込まれる物語なのですが、徐々に自分の運命を受け入れ、最後には満足して、帰ってきた夫に見守られて死んでいく。この運命を受け入れ、人生を最終的に肯定して死んでいくプロセスには鬼気迫るものがあります。主人公を演じたのはチェ・ジンシルという女優で、この作品で数々の賞を受賞したのですが、二〇〇八年には自殺してしまいました。

基本的に韓国ドラマというのは人生肯定の物語です。どんなに悲惨でも人生を肯定する。韓国ドラマの魅力の一つはそこにあります。

三　韓流の裏面

三・一　竹島（独島）

私が大邱に滞在していた二〇〇四年は日韓共に韓流ブームに沸いた一年であったわけですが、残りも少なくなった二〇〇五年の二月頃から事態が一変してしまいます。二〇〇五年二月末の在韓日本大使の「竹島（韓国名・トクト）は日本の領土」発言、続いて島根県の「竹島の日」制定条例の動き（その後可決）、さらに当時検定中（4月6日に検定通過）の扶桑社版公民教科書には「竹島は日本の領土」と記述する一方、歴史教科書には日本の植民地支配を正当化して強制連行や慰安婦問題にいっさい触れていないことが明らかになるなどの事件が相継ぎ、二週間ほどで対日感情があっという間に悪化して一九六五年日韓国交回復以来最悪といわれるほどになってしまいました（同時に日本人観光客が激減しているという報道がありました）。竹島問題は韓国人の反日感情が凝縮された沸点のようなものでここに触れると反日感情が激しく噴き出してくることがよくわかりました。「独島（トクト）は我らが領土」という歌があるほどで、韓国人は子供の時からトクト領土問題に強い執着を持つように育てられています。そのことを在韓日本大使が知らないはずはないのに、なぜ今こういう発言をするのか。口火を切ったのは在韓日本大使であったことは最近ではほとんど忘れられているようです。しかし島根県の「竹島の日」制定の動きがきっかけではなく、日本政府の政治的意図のもとで在韓日本大使の竹島発言があったのだと考えるべきだと思います。

日本側がトクト＝竹島についてこうした挑発をあらためてし始めた背景に、アメリカが日本政府の立場（トクト＝竹島日本領土説）を支持し始めたという事実があるように思います。ＣＩＡの出している「ワールド・ファクト・ブック」は従来の中立的な立場から日本政府寄りに立場を去年から変えているという報道（「東亜日報」二〇〇四年三月十三日付けの記事）や、小泉政権とブッシュ政権の異常な蜜月状態と対照的にぎくしゃくしたノ・ムヒョン政権とブッシュ政権の関係を考慮すれば、アメリカが日本政府をそそのかしているのではないかという疑念は当然生まれます。アメリカの意図は明白で、日本のアメリカ一辺倒をいささかでも揺るがすような日韓（そして日朝）関係の進展はこれを阻止する、ということです。しかし、アメリカの画策があるにせよ、一番の問題は、日本の極右勢力の跋扈であることはいうまでもありません。しかも竹島日本領土説にせよ扶桑社版教科書にせよ、一部の右翼の仕業であると弁解することはできません。なぜなら当時の小泉内閣の閣僚をはじめ、自民党の大部分、そして財界もまた、竹島日本領土説や扶桑社版教科

書を支持していることは明白だからです。

日本は、ハーグにある国際司法裁判所の審判を仰ごうと主張していますが、韓国はそれを拒否しています。一見日本の方に理がありそうです。これはどういうことでしょうか？

韓国にとって竹島＝トクト（独島）は、単なる領土の問題でもなければ、漁業権の問題でもなく、日本の植民地支配と結びついているのです。それはこういうことです。

形式上大韓帝国の外交権が完全に剥奪されるのは第二次日韓協約（一九〇五年十一月十七日）によってですが、すでに日露戦争中に朝鮮に駐留した日本軍を背景にして調印された日韓議定書（一九〇四年二月二三日）や第一次日韓協約（一九〇四年八月二二日）によって実質的に保護国化・植民地化が進行していたのであり、竹島の島根県編入（一九〇五年一月二八日）は植民地化の第一歩として韓国がとらえているのは当然です。さらに当時の高宗皇帝は一九〇七年の万国平和会議に三人の密使を送って日韓協約の無効を国際世論に訴えようとしましたが、すでに外交権を失っているという理由で無視されたのです。日本はすでに、イギリスとは日英同盟によって、アメリカとは桂・タフト密約によって、朝鮮植民地化への同意を取り付けていたからです。その万国平和会議が開かれたのは国際司法裁判所があるオランダのハーグでした。国際法というものは強国や大国に都合の良いものであり、弱小国にとっては国際法はあてに出来ないことを韓国は知っているので、国際司法裁判所へ持ち出そうという日本の戦略に同意しないと考えられるのです。

国際司法裁判所には日本人の裁判官が一人います。それは小和田という裁判官で、皇太子妃の父親です。韓国の新聞はこういうことまで報道しています。[註4]

現在また学習指導要領の解説書に竹島を明記したために、韓国の駐日大使は韓国に帰ったままになっています。文化的・経済的な韓流が奔流とならないように日本政府（とその背後にいる米国政府）は、定期的に竹島問題を持ち出してブレーキをかけようとしていると見ることができます。[註5]

二・二　嫌韓流

「韓流」という言葉の起源は、二〇〇〇年の一月に韓国の文化観光部が「韓流―Songs from Korea」というＣＤを制

作して、中国の放送局などに配布したのが発端だという説もあり、すでに中国では「韓流」という言葉が使われていたという説もあり、はっきりしませんが、いづれにせよ、二〇〇〇年頃に中国での現象を指して使われはじめた言葉であるということです。（小針進「嫌韓流」・『韓流ハンドブック』新書館・二〇〇七年）

二〇〇五年に韓流を押しとどめようとする政治的な力学が働くとともに、「嫌韓流」という流れが目立つようになりました。これは『マンガ嫌韓流』（山野車輪・晋遊舎・二〇〇五）で広まった言葉のようです。内容については、ここで立ち入る必要はないでしょうが、基本的に日本の明治以来の「脱亜入欧」あるいは「脱亜入米」的姿勢を維持しようとする動きであると見ることができます。韓流はアジア蔑視と欧米崇拝と大国主義を押し流しかねない危険性を孕んでいると察知した人びとが、嫌韓流に身を任せていると言っていいのではないかと思います。日本社会全体の右傾化の派生現象でもあります。

二・三　北朝鮮

韓国との関係は、嫌韓流などの反動的流れはあるものの、さすがに「脱亜入欧」的姿勢すなわち表裏一体となった欧米崇拝とアジア蔑視から脱却しつつあると言っていいと思いますが、北朝鮮に対してはその姿勢がまったく無反省に出てくるようです。嫌韓流と嫌北朝鮮流は同じ流れです。二〇〇二年の小泉首相の北朝鮮訪問を契機に拉致問題が明るみに出て、日本人の憎悪がことさらに掻きたてられ、国交正常化などどこかに吹き飛んでしまいました。

北朝鮮は経済的に破局状態であり、経済援助がのどから手がでるほど欲しいのだから、圧力をかけ続ければ必ず向こうが折れて来るというのは、単なる希望的観測にすぎないし、なによりも国交を回復しようとする相手に失礼極まる態度ではないでしょうか。独裁政権下の北朝鮮に関して我々が不満や批判を抱くのは当然だが、相手が無茶をするから、こちらも何をやってもよいということであれば、国交の正常化は無理です。拉致は極悪非道な行為であるが、一国を乗っ取るという極悪非道なことを日本がやったことを朝鮮の人々は忘れていないことを我々も心しておかなくてはならないでしょう。国交の正常化は互いに最低限の敬意がなければ成立しない。互いの非を潔く認めるところからしか正常化は始まらないのです。拉致被害者に非はありませんが、北朝鮮にとって植民地支配の清算はまだ終わっていないのです。

韓国人・朝鮮人がどれほど自尊心が強い人々か、強硬姿勢を主張する人びとはご存じであろうか。『風の丘を越えて』

のパンソリ芸人のユボンは同じパンソリ芸人の旧友から「あまり自尊心が強いと身を滅ぼすぞ」とたしなめられて、「それが無ければとっくに死んでいたさ」と答えます。「自尊心（チャジョンシム）」は韓国・朝鮮の人々を理解する最も重要な鍵の一つです。今のままの強硬姿勢を貫き、北朝鮮を敵視し蔑視する態度を改めないと、交渉は決裂したままで、拉致問題の解決は遠のくばかりではないでしょうか。

いずれにせよ、韓流ブームと北朝鮮バッシングはほぼ同時に日本列島を襲ったという事実は残ります。「ヨンさま」への熱狂と「将軍さま」への嘲笑と憎悪が共存しているのです。それは朝鮮半島がいまなお分断され続けているという事実に対応するものです。

以上韓流の裏面として①竹島・独島問題、②嫌韓流の問題、③北朝鮮バッシングの問題を取り上げました。もう一つ、これは韓流の裏面ではありませんが、韓流と在日韓国人および在日朝鮮人の関係についても、論じるべきことが多々あります。韓流は総じて在日には肯定的な影響を与えたと言って良いと思いますが、詳しく触れる準備がないので割愛します。

四、韓流の底流

四・一　脱亜入欧からの脱却

「脱・脱亜入欧」あるいは「脱亜入欧からの脱却」は、単に経済的にアジアとの関係を深めようということではなく（それはすでに現実です）、脱亜入欧が孕んでいた欧米崇拝とアジア蔑視からの脱却、さらに軍事力で最終的には物事を解決しようとする大国主義から文化優先の小国主義への価値観の転換を意味しています。つまり、福澤諭吉の《百巻の万国公法は数門の大砲に若かず、幾冊の和親条約は一筐の弾薬に若かず。大砲弾薬は以てある道理を主張するの備に非ずして無き道理を作るの器械なり。》という認識から《数発のミサイルは一本の映画に若かず。》というキム・デジュン元韓国大統領の認識へと価値転換を意味しています。この転換を促すような大きな潮流を私は「韓流の底流」と考えているのです。韓国映画や韓国ドラマはこの底流の一部であると言ってもいいと思います。

この底流をどのように捉えるべきか、いくつかの視点から接近を試みたいと思います。

四・二　東アジア地域共同体（比較政治学的・比較社会学的視点）

進藤榮一は、『東アジア共同体をどう作るか』（ちくま新書・二〇〇七年）において、三つの開国を区別しています。第一の開国（一八五三）は、十九世紀の産業革命を成就した欧米の列強（先頭をきったのは米国）に強いられた開国であり、領土拡大のテリトリーゲーム（帝国主義の時代・侵略戦争と植民地支配の時代・ヨーロッパの時代）への船出でありました。

第二の開国（一九四五）は、敗戦によって強いられたもので、やはり相手は米国でした。二十世紀工業革命の時代であり、それは言うまでもなくアメリカの時代でした。重要なことは、もはや領土を奪い合ったり植民地を拡大することが問題ではなく、市民生活の豊かさを求めるウエルス・ゲームの時代であったことだと進藤栄一は言います。

そして、第三の開国（二〇〇〇）とは二十一世紀情報革命を背景にした知識資本主義のナレッジ・ゲーム時代であり、アジアの時代であるというのが進藤栄一の主張です。ヨーロッパ連合がベネルクス三国の小国連合が中心になって成立し、ヨーロッパ連合（ＥＵ）のなかで戦争が起きることはもはや不可能になったように、東南アジア諸国連合（ＡＳＥＡＮ）を中心にして中国・韓国・日本などの大国が参加することで不戦共同体・経済共栄圏としての東アジア共同体を目指すべきだと言うのです。現代社会は、政治的に見れば地域統合が進み国民国家の主権は制限されつつある時代であると言えます。東アジア共同体やヨーロッパ連合のような地域共同体は、戦争を不可能にする不戦共同体として、温暖化などの環境問題や、金融危機などの経済問題を解決するために必要とされると考えられます。これらは各国民国家だけでは解決できない問題だからです。

さらに比較社会学者の見田宗介は、人間の社会を、原始社会・文明社会・近代社会・現代社会・未来社会の五つの社会に区別しています。近代社会は、持続不可能な一回限りの特別な時代であるとともに、国民国家を単位とする世界システム（侵略戦争と植民地支配の時代）であり、エネルギーの消費が急上昇を示し、当然地球環境への負荷も急上昇してゆく持続不可能な社会です。持続可能な社会としての未来社会に接続するためには近代社会の生き方や価値観を変える必要があるのは明らかです。

現代社会とは、近代をさらに過激にしたウルトラ・モダンのベクトル（その代表は米国）と、近代とは異なる生き方・

価値観を模索し創造するベクトルが共存している過渡的な時代です（見田宗介『社会学入門―人間と社会の未来』・岩波新書・二〇〇六年）。比較社会学的に見ると、近代を先鋭化した現代社会の典型である米国式価値観や生き方は越えられなければならないものであることを理解することができます。そして未来社会へ通ずる価値観や生き方は、近代が否定してきた前近代的なもののなかに、そして欧米の近代が抑圧してきたアジアのなかにヒントがあるかもしれないと考えることができます。

四・三　方法としてのアジア（比較思想的視点）

竹内好は、「脱亜入欧」的思想の支配する時代に徹底的にアジア（とりわけ中国）と日本の関係を考え抜いた人ですが、「方法としてのアジア」（一九六一）という論文で、次のように提案しています（『日本とアジア』ちくま学芸文庫・一九九三）。

≪今までのように日本の近代化というものをいつも西欧の先進国との比較だけで考えるのはいけないのではないか、（…）。少なくとも中国とかインドというような、日本と違った道を歩んだ別の方を持って来て、三本立てにしなければいけない（…）。≫（p.455）

「脱亜入欧」的姿勢というのは、すぐれた欧米を模範としてそこに近づこうという姿勢ですから、欧米の近代文明に対する批判的観点がどうしても育たないと同時に、アジアの文明に対しては無知か蔑視の態度で接するということになります。「脱・脱亜入欧（米）」的姿勢とは、欧米の近代文明が否定してきたアジアの文明の側から逆に欧米の近代文明を撃つという発想です。だが単に近代文明を否定したり批判したりするのではなく、「包み直す」あるいは「巻き返す」ということ、それが主体形成の過程になりうるのではないかということ。半世紀前の発言ですが、今でも貴重な示唆を我々の未来に投げかけていると思います。

≪西欧的な優れた文化価値を、より大規模に実現するために、西洋をもう一度東洋によって包み直す、逆に西洋自身をこちらから変革する、この文化的な巻返し、あるいは価値の上の巻返しによって普遍性をつくり出す。東洋の力が西洋の生み出した普遍的価値をより高めるために西洋を変革する。これが東対西の今の問題点になっている。これは政治上の問題であるとともに文化上の問題である。日本人もそういう構想をもたなければならない。

その巻き返す時に、自分のなかに独自なものがなければならない。それが何かというと、おそらくそういうものが実体としてあるとは思わない。しかし方法としては、つまり主体形成の過程としては、ありうるのではないかと思ったので、「方法としてのアジア」という題をつけたわけですが、それを明確に規定することは私にもできないのです。≫(pp. 469-470)

五、おわりに― 恨みの晴らし方・恨（ハン）の解き方

「恨みを晴らす」というのは、要するに復讐であり、普遍的なテーマです。パク・チャヌク監督の『復讐者に憐れみを』（二〇〇二）、『オールド・ボーイ』（二〇〇三年）・『親切なクムジャさん』（二〇〇五年）は復讐三部作と言われるように血みどろの復讐劇ですし、韓国のテレビドラマにも復讐ものが多いことはご存じだと思います。日本人が最も愛好する「国民の物語（ナショナル・ストーリー＝国民としてのアイデンティティを形成する物語）」である『忠臣蔵』も典型的な復讐の物語です。主君の恨みを晴らすための仇討ちの物語で、切腹で始まり切腹で終わる死の物語です（主要登場人物達はすべて死ぬ）。クライマックスは討ち入り（これは一種のテロである）の場面だが、そこに至る長い周到な準備も物語の特徴となっています。

まったくこれと対照的なのが、韓国のナショナル・ストーリー「春香伝」です。出産で始まり出産で終わる生と性を賛美する物語、李夢龍と成春香の出会いと別れ、悪代官の迫害と春香の抵抗の物語。「忠臣蔵」が徹頭徹尾男たちの物語であるのに対し、「春香伝」は一人の女性個人を賛美する物語です。最後には夢龍が暗行御史（一種の隠密）となって帰り春香を迫害した悪代官の不正を暴き春香を解放するので、復讐劇の一面もありますが、物語のクライマックスは、春香が貞節を守るために拷問に耐え横暴な権力者に抵抗しぬく場面（恨（ハン）が積もってゆく場面）にこそあるのではないでしょうか。

恨（ハン）について、恨（ハン）を解くことについて、『西便制（ソピョンジェ）（「風の丘を越えて」）』の原作者・李清俊（イ・チョンジュン）は、次にように述べています。

≪「恨（ハン）」とは自分の席、自分の位置が喪われてしまったときに感じる痛みのことである。恨を自分の外側で解こうとすると怨恨に終わることがあるが、これを自己の内側で解消すると、内部の充実した創造的エネルギーに転じるこ

とができる。相手を許すことが大切なのは、それが内側で恨を解くことに通じているからである。真の許しとは、内側で恨が解けることと同じでなければならない。樹木は落ち葉の痛みを甘受してこそ、新しい生命を手にできるのではないか。≫（四方田犬彦『ソウルの風景』岩波新書・二〇〇二・p.163）

『風の丘を越えて』で、ユボンはソンファの声に恨（ハン）を染みこませるために彼女の視力を毒薬を飲ませて奪ってしまうのですが、悲惨な放浪生活を続けるうちにようやく恨（ハン）を表現しうるようになったソンファにたいして、「恨（ハン）に埋もれず恨（ハン）を越えよ」と言い残して死んだのでした。ここで「恨（ハン）を越える」と訳されているのは「恨（ハン）を解く」ということです。そして「恨（ハン）を解く」ことと「真の許し」は同じことだと原作者のイ・チョンジュンは述べています。ソンファは数十年ぶりに尋ねてきた弟と一晩パンソリを歌い明かした後、「私たちはこの夜恨（ハン）を越えました（より正確には恨（ハン）を解きました）」と言ったのでした。それは彼女が自分を棄てて逃げた弟がふたたび自分を探しに来て太鼓を伴奏してくれたことによって、弟を許しえて、恨（ハン）を解くことが出来たということを意味しています。

韓国のテレビドラマでも「許し」というのは重要なテーマになっています。「許し」と「ハンを解く」ことは表裏一体なのです。「ハンを解く」すなわち「許す」ためには、許すことができるように相手が振る舞う必要があります。『チャングムの誓い』において、チャングムが、彼女の母を死に追いやり、彼女を迫害し続けたチェ・サングンに「私があなたを許せるようにしてください」と述べる場面があります。「従軍慰安婦」と呼ばれる女性たちが日本政府に要求しているのもこのことではないでしょうか。

恨みを晴らすのではなく、恨（ハン）を解くという生き方は、≪西欧的な優れた文化価値を、より大規模に実現するために、西洋をもう一度東洋によって包み直す、逆に西洋自身をこちらから変革する、この文化的な巻返し、あるいは価値の上の巻返しによって普遍性をつくり出す。東洋の力が西洋の生み出した普遍的価値をより高めるために西洋を変革する。≫という竹内好の示唆の一つの実例になるのではないかと思っています。

註1　日本の戦後史は、米国に無条件降伏し、占領され、属国になり、いまでも属国であるのに、そのことに日本国民が目をそらし続けてきた歴史である。この事実を、孫崎享『戦後史の正体』（創元社・二〇一二）は赤裸々に描いている。その事実に目をそらさせ続けてきた大手マス

コミが無視する中で、ツイッターなどの力で発売後一ヶ月余りにして二〇万部のベストセラーになったこと自体画期的で、日本社会の深層からの変化（対米追随からの脱却＝日本の独立＝脱「脱亜入欧（米）」）につながる契機になるのではないかと期待をいだかせる。

註2　私は講演の時点で、「脱亜入欧（米）」的姿勢を、欧米崇拝とアジア蔑視と大国主義から構成されると述べていたが、現在であれば、米国崇拝とアジア蔑視を連結する中核的要素として天皇制を挙げたいと思う。『戦後史の正体』は、戦後史を対米自主派と対米追随派の葛藤として、そしてつねに対米追随派が主導権を握ってきたことを明らかにした。たとえば、マッカーサーと対等に渡り合い、再軍備を拒み通した吉田茂像を破壊して、米国追随路線を定着させた張本人として告発している。孫崎亨氏が粉々にしたその古い吉田茂像を蒸し返したドラマをＮＨＫが今年の九月から放映し始めたのは偶然だろうか。それはともかく、孫崎亨氏は旧安保条約を調印したことを吉田茂の最大の問題点として批判しているのだが、豊下楢彦『安保条約の成立―吉田外交と天皇外交―』（岩波新書・1996）と『天皇・マッカーサー会見』（岩波現代文庫・2008）を読むと、吉田茂にそのように命じたのは昭和天皇自身であり、旧安保条約こそ天皇制が存続するために身にまとった新しい「国体」であるという事実が浮かび上がってくる。この旧安保条約の成立のために、マッカーサーや吉田茂の頭越しにダレスと直接に交渉するほどに積極的な外交を昭和天皇はくり返していたというのである。孫崎氏はツイッター（2012/09/05）でオーストラリアの日本研究者ギャバン・マコーマックの発言を伝えている。「今日の日米関係は世界史的にみて希有な存在。普通、国家が他国に隷属させられる時には強い反発が存在し、それを強権で押さえる。日本は逆に、我先に自発的に隷属する。不思議な国だ。日本は。」その不思議を解く鍵は、天皇制と安保体制の深い結びつきにあると考えられる。昭和天皇こそ最大の対米追随派であり、最大の天皇制擁護者は米国であったのである。

註3　九月一日にＮＨＫＢＳ２で放映された「ドキュメンタリー WAVE 東アジア物流大変動―躍進する韓国プサン」によると、現在のコンテナ取扱量ランキングは、一位・上海、二位シンガポール、三位・香港、四位・深圳、五位・プサンであるが、日本の港湾としては東京二七位、横浜三六位、神戸は四六位である。一九七〇年代には神戸のコンテナ取扱量が世界一であったこと、一九八〇年でも世界第三位であったことを考えると、隔世の感がある。一九九五年の阪神淡路大震災が神戸港の没落に拍車をかけたことはたしかだが、根本的な理由は、モノからカネへ経済の主軸を移そうとして日本政府が港湾の整備を怠ったためである。いずれにせよ、韓流の背景にあったのは東アジアが世界の物流の中心になったということである。プサンはまた韓国映画産業の中心都市でもある。

註4　小和田氏は二〇〇三年以来現職であり、二〇〇九年から二〇一二年まで三年にわたって裁判所長も務めた。

註5　日本の領土問題（日韓の間には竹島＝独島、日中の間には尖閣諸島＝釣魚諸島、日ソ間には北方領土）は全体として、米国の東アジア戦略のなかで考察する必要がある。それは米国が意図的に日本と隣国との間に領土紛争の火種を残しておき、領土紛争を時々燃え上がらせては、日本を東アジアから孤立させ、その孤立故に米国に依存せざるをえなくするという戦略である。米国にとって、日中韓露などが東アジア共同体を形成して米国に対立することは最悪のシナリオであり、日本を東アジアの孤児にしておくことを、領土問題を利用して米国は意図的に追求していると見るべきだと思われる。このことは孫崎亨『日本の領土問題』（ちくま新書）に北方領土については詳しく、尖閣諸島や竹島＝独島についてはある程度述べられている。

次に指摘しておきたいのは、尖閣諸島を日本領土（石垣市）に取り込んだのは一八九五年の日清戦争の最中（すでに日本の勝利は確実になっ

た頃）であり、竹島＝独島を日本領土（島根県）に編入したのは一九〇五年日露戦争の直最中で朝鮮半島に大量の日本軍が駐留していた時であり、北方領土は言うまでもなく一九四五年アジア太平洋戦争の敗戦によってソ連領になったものであるということ、つまりこれらの領土問題は日清・日露からアジア太平洋戦争にいたる日本近代の帝国主義（侵略戦争と植民地支配）の負の遺産であるということである。

領土問題が含むこの次元（帝国主義をどう捉えるかという問題）は、日本人の多くは気がついていない（孫崎享氏も元外交官だけあって、日本の国益という観点から領土問題を捉えている）。韓国の人々の竹島＝独島への思い入れの深さを日本人が理解しないのも、日本人がオキナワ・ヒロシマ・ナガサキで終わった日本近代の帝国主義を根本的に批判して再出発することなく、米国に属国化されてしまっているからである。

日韓の間の清算されていない負の遺産として従軍慰安婦の問題があるが、これは日本近代帝国主義の深奥の問題で、この問題が竹島＝独島問題とならんで、日韓の間のとげとして残っていることは確かである。北朝鮮との間には、拉致問題を含む北朝鮮との国交正常化問題がある。これも日本の近代史全体を問い直さざるをえない根本問題である。

最後に、これらの問題（領土・従軍慰安婦・拉致・国交正常化）を解決するためには、日本は米国の属国状態から脱却し、一九世紀・二〇世紀の帝国主義を克服した東アジア秩序（東アジア共同体）の形成へと国の方針を変える必要があるということを指摘しておきたい。なぜ、米国の属国状態からの脱却が必要かと言うと、米国は一九世紀・二〇世紀型の軍事力による世界支配（帝国主義）を今世紀にも継続しようとしているからであり、日本にある巨大な米軍基地は米国の世界支配の主要な手段にほかならないからである。日本の周辺の小島について領有権を主張する前に、日本を米軍が「実効支配」している状態から脱却すべきであろう。しかしこの状態から目をそらさせるために領土問題が利用されているのである。（二〇一二年九月一八日脱稿）